

世界の宗教の基本 海外で出会った宗教観

ユキーナ・富塚・サントス

# 世界の宗教の基本 海外で出会った宗教観

1	ホスタイル（敵意）とは？ .....	3
2	イタリアの理由 .....	4
3	砂漠の民 .....	5
4	イタリアファッション洗礼 .....	7
5	センスと宗教 .....	8
6	敵意を受けた日 .....	12

## 1 ホスタイル（敵意）とは？

敵意のことをホスタイルという、悪意ある「のっとり」はホスタイル・テイクオーバーという。

なぜこれを感じるのか。自分が受けた敵意についてしみじみ考えているからである。おそらくこれが、人生の中で受ける、数少ない敵意であって欲しいと、今はそれだけ考えている。

宗教について、それに端を発する、私が受けたホスタイル（敵意）について素描する。

ある会社の履歴書のカバーレターにこう書いた。

ご存知の方も多いかと思うが、履歴書にはカバーレターが必要になる。自分は何者で、この会社で何をして、将来どうなりたいかをつらつらとしたため、リクルーターに一目瞭然理解させる目的である。

なぜ私がイタリアのMBAを選んだのか？

元来、不動産ということが嫌いではなかった。いろんな土地に赴き、都市の発展、生活と関連づけた土地、建物の使われ方を見るのは、非常に楽しかった。

例えば、ヨーロッパでは教会を中心に街が発展する。日本では寺社仏閣の近くに家があると、住環境上マイナス要因になる。アメリカではこのようなことはない。宗教上のモニュメントひとつとっても、正反対の見方ができる。

思うに、有史以来、人はダイナミックになってきた。本来自然を前提に、そこから人の生活が発展するのが、自然のことわりと思う。しかし、人間は生まれ育った場所からあえてはなれ、動的な変遷を繰り返してきている。

当たり前だが、不動産は動かない。一方、ダイナミックに人間が動けば、この不動の価値を知ることができる。そこに、新たな発想が生まれる。山、川、海を乗り越えて、遠征したお陰で、気づかなかった多くのことを理解し、進歩を作り上げることができる。

私がダイナミックになっているのはそのためである。

## 2 イタリアの理由

なぜイタリアか、アングロサクソン、カソリック、ヨーロッパ社会、アメリカ社会の起源だからである。（もともとかぶれていたという理由はさておき）そのカルチャーを知るには、旅行者であるより、社会を、端的に言えば、ビジネス社会の指導者を知る必要があった。

世界をみるに、いまだアメリカで生まれたビジネス理論が健在である。英語の **dominant** という表現に近い。ビジネスの理屈を知るとは、今後どこで生きていくにしても基本となるだろうと思った。

理論は価値とツールに分かれる。何に価値を見出すか、先ほどの例では、教会をグッドとみるかバッドとみるか、価値観が基本になる。その価値観に基づいて、現状、目的、手段が講じられる。ツールとは目的に向かう一連の流れ、資源をどう配分し、どのような結果を得るかという手段にすぎない。

例えば、個人の、人間単体で最大の効果を上げることに最大の価値を見出すとする。最大の価値は最終的に数量把握できる富である。個人の資産量としよう。いかにそれを最短で最大化できるかが目的になる。手段はこの目的に従って「有効」に組み立てなければならない。社会の仕組みが、ある程度年功序列、数量重視であれば、目的達成は容易になる。自分がその仕組みに沿ってフィットし、サクセスストーリーを最短で作れるのであれば。

単体で最短、最大の効果に価値がフォーカスされていれば、生み出される理論は納得がいくのである。M&A (merger and acquisition 企業買収のこと) など価値実現のツールとしては最も良い例である。

価値観と関連させて捉えなければ、ビジネス理論自体、日本人の私にとって、本当に「使える」ものにはならない。そういう意味でMBAは必要であった。

人の人生は短い、その限られた時間とお金、もっと貴重なのは私のエネルギーというリソースを有効に使うのに、イタリアでMBAを学ぶのが最も手っ取り早かった。加えて、このプログラムでは交換留学ができる。アメリカが見れる。私にとっては、チャレンジングであっても、最も効率が良かった。

### 3 砂漠の民

さて、話を宗教に戻す。

クリスチャン、イスラムが砂漠の民であった当時は良かった。少なくとも地理的移動は限られていたからである。それであっても、彼らの価値が砂漠に生まれたということ自体が、彼らをダイナミックにさせざるを得なかったという意味で、既に宿命であったのかもしれない。

昨今、地球上あらゆるところに、人間の移動が可能になった。独自の世界があっても、自分の世界とは受け入れない人間が流入してくる。不動のものに、可動の人間が、古今東西、老若男女を問わず、ワサワサ入ってくるのである。

一つのカルチャー（何度も繰り返すが、カルチャーとは宗教観に根ざした価値の表れである。）に、全く相容れない異種のカルチャーが合わさってきたらどうなるか？

答えは二種類、自分のカルチャーに同化させるか、あるいは敵意を蔵して耐え忍ぶかである。

前者、無理やり自分のカルチャーに同化させるというのはアメリカの例である。ただ、繰り返しになるが、現在のアメリカのカルチャーはその建国時とは趣を若干異にしている。無論、依然としてワスプ（ホワイ、アングロサクソン、プロテスタント）の影響は強いが、ジェネラスを理由に多くの移民を受け入れた。

その結果、世代を通じてのワस्पカルチャーの浸透は余り見られていない。最も解りやすい理屈（質より量、多数決、金を稼いで優雅な引退が究極の花道）が支配している。それがアメリカである。

後者は、もう一つの一神教（イスラム）に端的に現れる。私が一神教を受け入れがたいと思う理由は必ず正義があるからである。神がいて、人間がいる。それ以外のものは教義上定義できないのである。善があつて悪がある。一神教を信条とする以上、この善悪の区切りは必然になる。

寛容、調和、自然の理ということは、はなから議論になりえないのである。

ここまできて、なんのこっちゃ？と思われる方が多いと思う。ハリウッドが創っていることに意味があるのだが、「イントレランス」という白黒大作映画をごらんになっていただければ、薄ぼんやりと、言わんとすることのニュアンスを理解してもらえと思う。

さて、ここで私の人となり、である。

なぜイタリアに惹かれたのか？理由はいろいろあるが、自分の価値観が覚醒されたからである。価値観とは、「美しいものは美しい」ということである。

若いときには、地味な服ばかりを着ていた。派手な格好、女らしさをウリにする女性を、「頭の中身もないくせに、男に媚ばかり売りやがって！！」と目くじらたてて軽蔑していた気がする。今にして思えば、失礼な話で、若気の至りというやつである。

寒色系の服ばかりを好んできて、体の線を隠すような、野暮ったい格好をしていた。

今の私を知る人には、驚きの事実かもしれないが・・・化粧もせず、髪形もこだわらず、いつも何かの目標に向かって、わき目もふらずに黙々と努力していた。人を笑わせる才能だけは大いにウケていたようで、私がプロテスタント的な努力家の驕りをもって

いても、人様とコミュニケーションできたのは、一重にこのお笑い体質のお陰とも思っている。

自分ではさほど、気づかなかったが、あとから人の話をきくと、コンサバを好む殿方には、けっこうウケていたようである。

そんな私が、イタリアで受けた洗礼とは？

一言で言えば、人間の美しさである。ルネッサンス発祥の地、フィレンツェに行っても、ローマに行っても、未だに恋して病まないヴェネチアにしても、人間を中心とした美については事欠かない。

最初に惚れたのは、ローマ、テルミニ駅広場にかかる、ヴァレンチノのポスターであった。

上半身裸の男性が、ネクタイだけをつけ、伸びをするようなポーズをしている。右下にブランドのロゴが入っていた。当然白黒である。そのモデルの顔も、体の線も、ネクタイの柄も、今でも鮮やかに覚えている。当時22だった私は、このどうしようもない艶っぽさに、ドギマギしたものである。このポスターの写真を撮らなかったことは未だに後悔している。

## 4 イタリアファッション洗礼

絵画やアートで人間の肉体を、その美しさを賛美して描くことはイタリア人の得意とするところである。しかし、彼らのファッション哲学、それ自体がショックであった。おそらく、人間は美しいものという絶対の信念があるからだろう。美しいものは、それなりに美しく見せなければならない。美を隠してはいけない。これが彼らのファッション哲学である。

華美、豪華を嫌い、衣服というものは、外敵、寒さから身を守るためのものという質実剛健、質素を至上とする、アングロサクソン文化とは違うのだ。

イタリアブランドは概して、体のラインを阻害しない。イタリア女優、モニカ・ベルッチを見ればわかるように、美しい人はより綺麗にラインがでるようにできている。それなりの人も、それなりかやや美しめに見せるように工夫されている。素材とラインは、彼らが命をかける（というとチト大げさか？）ところではないか。

女性であれば、女性を象徴する腰、胸元、ここいらはデザイナーが最も気をつかわなければいけないところである。私自身、イタリア物を身に付けるようになってから、初めてこの違いに気づいた。特に、日本人でも最近増えてきていると思うが、脚、腰、胸のラインが自分の長所（ウリ）だと思える人は、積極的にイタリアンを着るべきである。

さらに天才的な色のセンスがある。色使いを学ぶのに、イタリア人以上の先生はいない。私の持論である。彼らは一見、奇抜なようで、実は最も自然というもの、ナチュラルというものを心得ている。難しい色もたくみにアースカラー（自然が持つ色）とあわせるし、目を見張るようなショッキングな色は、実は宝石など自然のマテリアルと組み合わせるためにデザインされるというのが真髄である。

日本文化の色彩も実に豊かであるが、洋服となると、奴らの色使いはまさにあっぴれなのである。

うたたねに、恋しき人をみてしより・・・ではないが、イタリアをみてしより、私の好みは変わってしまった。なぜなら、美しいものは美しく、ということの重要さに目覚めたからである。

## 5 センスと宗教

人間の体は美しい。この大前提に立つ。人の体は千差万別、同じものは二つとしてない。

ましてや、あらゆる価値観に照らして、完璧な肉体など、存在しないのである。この特徴に気づくと、自分の体を客観的に眺めるようになる。アピールすべき点はどこで、欠点はどこか。美しい部分はより美しく、欠点は補って見せることができるようになる。

私の場合、全体的に小柄なので、縦長の演出をするようにしている。全体の色を統一するのは、小さい印象を和らげるためである。さらに、胸・腰などのラインは疎外しない程度に、温かみをかんじさせるように、強調することになっている。

どうでもいいことに思えるかもしれないが、今を生きている、「生」を感じる一つの手段だと私は思っている。

今の私は、かつてのプロテスタント的、コンサバ娘の私がみたら、真っ先に軽蔑するタイプだろう。もっとも私はどんなにセクシーな格好をしても、品位を大切にしているつもりだが、バリバリ質実剛健を地でいっていた昔の自分には、こんな微妙なセンスなど、もともと関心がないから、理解しようとする気持ちすらもちあわせてなかっただろう。

美しく、女らしく、そして品がある、これをモットーにしているつもりだが、昨今の日本に帰ると、たまらなくアンカンファタブルである。私が帰国に二の足をふむのもこんな理由がある。

着る物のセンスがあつてるなあと感じるのはやはり、イタリアにいるときである。ファッション業界にいた友人とも、話はしないがお互いセンスを共有できる。

さて、長々書いたが、なぜこの話をするのかである。

端的に言えば、このセクシーな品のよさ、身のこなし、インテリ（知性）とセンシティブ（敏感であること）とセンシヤル（官能的）であることは、特定のカルチャーからは歓迎されない。

インテリ、センシカルは端的に言えば、悪の化身ともなりうるのである。ましてや私はタバコは吸わないが酒は飲む。非常に原理主義が強く、戒律に従って生活することに快感を感じる人には、私の存在自体がムカツクのである。

前にも書いたが、私自身、ソフト、当たりの柔らかさをモットーにしているので、人から嫉妬はされても、恨みを買う人間ではないと思っている。しかし、自分が世界をダイナミックに動き、さまざまなカルチャーに触れば、これは避けられない問題なのである。

極論からいえば、私はカテゴリーに落ちないのである。

私が、イタリア女で、タバコをふかし、ワインを浴びて、魔女のようなメイクをし、イタリアンファッションで身を固めていたとする。カソリックと受け入れないイスラム原理主義、あるいはプロテスタントの人間であれば、私を悪に染まった、哀れな女と分類し、認識することができる。

しかし、私はバリバリ、アジア人な人間である。体つきが西洋人体系なので、もっとも似合う出で立ちをしているだけである。アジア人のような柔らかさと、しかもイタリア人のようなセンシカルな感じ、二つもつものを調和させている。だが、この二つの要素の融合はカテゴライズできないのである。一定のカルチャー、価値観を持つ人にとっては。

繰り返すが、一神教の基本は唯一の神である。したがって、善か悪のふたつしかない。その間が合ってはならないし、まったく別の概念など教義上創れないのである。

それでは、彼らは私のような人間をどう扱うか？善悪、このどちらかに分類するのである。敵かもしくは「みかた」か？

仲間として受け入れるよりも、敵とする方が付き合い上は楽である。ビジネスの利害関係がなければ、接触を避けてさえいれば、これにまさる幸福は無い。

敵だとカテゴライズしたら、この悪をどう処していくか。まず接触をさけることである。とことん避けられるところまでさけて、それでも無理なら、意を決して徹底的に戦わねばならない。ガツンと殴るか、ドカンと爆弾を落とすかである。倫理的思考が強ければ強いほど、この傾向は顕著になる。

私が、世界を見て周り、インターナショナルな文化の違いを学んで、ぶち当たった壁がこれであった。

私自身の飲酒の習慣、みかけ・みてくれが悪の権化であれば、見方によっては美しいものも、敵意の対象となる。

私が受けていたのは、こうした他人が私に向けていた敵意（ホスタイル）、つまり毒であった。

唐突だが、人間「見かけ」である。意外なように思うかもしれない。外面じゃなく、中身を見てよとおっしゃるかもしれない。ごもつとも、である。しかし、が、しかし、人間ある一定年数経つと、内面が外側に現れてくる。優しそうな人間は優しさを呈しているし、内面に何か不安を抱えていれば、それは、目に、表情に、顔色に、そして些細な態度にあわられてくる。

今となっては、私に敵意を抱えていた人物の身体的特徴は、ホスタイル（ホルスタインではない）の表れと思えば、納得がいくのであった。敵意を持ち続けることは、ある意味ストレスである。そのストレスを解消する何らかの術が必要である。だが、そこに戒律があれば、酒・タバコ、異性に走るわけにはいかない。まだ許される食に走る以外はない。

閉ざされた瞳で、多量の香辛料をふりかけて、山盛りのベジタリアンミールを黙々と食べていた、この人物の姿を私は忘れることができない。

## 6 敵意を受けた日

これは確かに、私にはいかんともしがたいストレスである。私自身がホスタイル、敵意の対象であるので、地球の裏側とまではいかないまでも、私に敵意を抱く人物の、視界の外に逃げる以外にない。

このホスタイルに気づかず、おいそれと近づこうもんなら、宗教の原理主義者、ピューリタニズムを旨とする人を追い詰めることになる。秘かに溜めたホスタイルは知らず知らずの間に山積されていく。

彼らの神が許したもう、正義の力を、おそらく彼らに与えるだろう。

「I am very, very uncomfortable. (あなたの存在、あなたが私にしたことのせいで) 私は、非常に気分がわるい。(チョー、胸くそ悪いぐらいの訳が適当か?)」

この一文を読んで、メールの最初から最後までを繰り返し読み返した。私は始めて、このメッセージの裏に潜む、恐ろしいホスタイルに気づいたのであった。

この人物と私との、一連のやり取りを再度思い返し、ホスタイルということに思いを馳せ、私自身が敵意の対象であったと、今、確信を持って理解したのであった。

自分の考えを整理し、すべきことを整理し、そしてふと気がついた。

何という偶然であろうか。

私が、このメールの主から、ホスタイルで攻撃されたのは、9月11日だったのである。